二階堂たけふみ市政報告

発行：二階堂たけふみ後援会　http://nikaidou.net
福島市町庭坂字内町51−2　TEL０２４−５９１−１１３８

木幡市政2期目のスタート、12月定例会議
一般質問で市政各般の課題を追及

木幡浩市長は10月中旬、福島駅東口地区市街地再開発事業について、福島県に対し十分な予算確保を要望しました。公的な補助の見通し、ならびに令和8年の施設オープンに向けてのスケジュールについて質問しました。

都市政策部長は、「エリア内の飲食店、物販店の営業終了は今年3月末まで。その後は既存建物解体工事に着手して、令和5年から令和7年度の3カ年で建築工事を行い、令和8年度の施設オープンの予定」と答弁。

続いて、この再開発期間における中心部の空洞化に対する市民の懸念について、これを払拭する今後の取組みについて質問しました。

コロナ感染対策のアクリル板越しなので反射しています

商工観光部長が答弁。「商店街エリア価値向上支援事業、空き店舗への出店や新規創業支援により、街なか全体の魅力向上を図ります。また、商店街等活性化イベント支援事業によるにぎわいの確保とともに、『街なか広場』の整備、『パークアンドライド事業』、『シェアサイクル事業』などソフト、ハード両面から街なかの人流を促してまいります」

駅東口地区市街地の再開発事業について
令和8年度の施設オープン予定

「公立夜間中学の設置」を市長表明

今議会冒頭の市長の提案説明で、公立夜間中学の福島市への設置について、令和6年度の設置を目指すことを明言。すでに、今回の市長選の公約で「夜間中学の開設」を掲げていたが、開設にあたっての所見を伺いました。

中核市市長会幹事市として国へ政策提言

11月中旬、中核市市長会の副会長の木幡市長が、幹事市として「ポストコロナ時代を見据えた新たなまちづくりに関する提言」を取りまとめて国に提言しました。そのポイントと共に、今後、国に対して、どのような政策提言を行っていく考えなのか、直接、木幡市長に質しました。

小中学校の運動施設の照明について要望

初めに、地元の吾妻中学校では10月までに体育館と校舎のＬＥＤ化の工事が終わり、「今まで暗かったので、明るくなり、大分、教育環境が改善されました」と喜ばれました。

そこで、小・中学校の体育館の水銀灯からＬＥＤへの入替状況を伺いました。

次に、吾妻中学校グランドには学校施設開放事業の夜間照明設備がありますが、「秋から冬にかけての日没が早まる期間は部活動へも利用範囲を広げて有効活用させて欲しい」との生徒、保護者の声をもとに質問しました。

教育部長は、「夜間照明設備が設置されていない学校もあり、公平性の面から課題があることから、利用範囲を部活動へ広げることは考えておりません」と従来の答弁でした。

しかし、部活も教育活動の一つとして、今後、地域性等に考慮して、生徒や保護者の声に寄り添った柔軟な対応をすべきと要望しました。（2頁に続く）

認知症高齢者と家族が安心して暮らせるまちづくりを

（一般質問続き）

まず、福島市における認知症高齢者数について直近のデータを伺い、最近、話題になっている認知症高齢者の事故やトラブルと自治体独自の救済制度について質問しました。すでに、自治体における認知症保険加入支援について、令和2年7月時点で少なくとも全国で61市区町村が補償制度の運用を始めていて、県内でも白河市、田村市が行っています。

昨年の福島市社会福祉審議会高齢者福祉専門分科会でも、委員から家族の皆さんが安心できる自治体による認知症保険加入支援の要望が出されました。そこで認知症高齢者と家族が安心して暮らせるまちづくりの具体的な施策の実現に踏み切る時として見解を質しました。

健康福祉部長は、「自治体による保険加入支援については、全国市長会において、国に対して認知症患者が起こした事故に対する損害賠償請求に係る支援制度の創設を提言しており、その状況を注視するとともに、政策効果の更なる検証、運用にあたっての課題などを踏まえて、今後の対応について検討していく」との答弁でした。

この質問の直前に、38年間ずっとボランティアで「認知症の人と家族の会」を支え続けて来られた福島県支部代表世話人の佐藤和子さんにお会いして伺った話を紹介しました。

「今まで、不安でひっそり一人で抱えてきた家族の皆さんが、このような行政の制度、認知症高齢者向けの自治体補償があれば、認知症対策の突破口になります。最初は何か事があれば、家族の自己責任と言われたのが、社会が支える形を具体化した制度です。認知症の人と家族を社会が支え、安心して暮らせるまちづくりの施策です。家族の皆さんがまちのぞんでいます」

認知症の人にも優しい県都ふくしまへ、一歩ふみ出しませんか。

蘇（よみがえ）った山車と太鼓で鷲神社の例大祭の盛況を祈念

10年がかりの取組み

「市政だより」令和3年12月号の13ページに、「コミュニティ助成事業を行いました」の見出しで、今年度の助成団体として長沼町内会、助成内容として「山車修繕と太鼓の更新」が小さな囲み記事で紹介されました。

町庭坂の総鎮守「鷲神社」の例大祭では、長沼、新町、内町、湯町の町内会会員で構成される「鼓友会」で山車を巡行しています。

今回、助成を受けた内容は次の二つです。

一つは、制作から67年が経過して老朽化した山車の「鬼彫刻と屋根箱棟の塗り直しと金箔貼り」の修繕。さらに、太鼓を新規購入しました。

かかった費用総額の内、２５０万円の助成を受けることができました。今回、助成を受けた備品には「宝くじシール（クーちゃんシール）」が貼ってあります。

ここに漕ぎ着けるまでには、ちょうど10年の歳月がかかりました。このコミュニティ助成事業の申請のお手伝いをしたのは、議員駆け出しのころの平成24年10月15日でした。当時の長沼町内会庶務であり、鼓友会会長であった菅野孝三さん（故人）からの相談があり、助成申請資料の取り寄せや知り合いの楽器店への見積もり依頼と奔走したことが懐かしくもあります。申請の列に並んだのは、10数番目。

あれから10年です。その後、バトンを受け継いでいただいた現長沼町内会会長の河野さん、鼓友会会長の清野さんのご尽力でここに至ることができました。コロナ禍を克服して、今年の秋まつりには蘇った山車と太鼓も加わり、同じ地区内の永鑑会と駅前町内会の山車と一緒に、鷲神社の例大祭が大いに盛り上がることを祈念します。

（写真提供／鼓友会）

八反田川の護岸補修工事完了で安心

令和元年の台風19号により、八反田川の折戸橋周辺の護岸が削り取られた件は、応急処置で積んでいただいた大型土嚢袋が紫外線劣化で破けたままでしたが、昨年10月中旬、「ふとんかご工法」で工事が完了しました。一時は、地域一帯が停電するのではという不安がありましたが一安心です。